

2018/10/28

「ペテロの話」

■ペテロとイエス・キリストとの出会い

「群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と言われた。するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみしましょう。」そして、そのとおりにすると、たくさんの魚がはいり、網は破れそうになった。そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになった。これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなもの者も、ひどく驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。」（ルカ 5:1-11）

人は誰でも心の奥底で神を求めて生きているのですが、この世界では誰が神なのかわかりません。ペテロもイエス様と出会った時、この方が神なのかどうか確証が持てないまま、とりあえずイエス様の言葉に従って船を出し、網を下ろしてみたのです。すると、船が沈みそうになるほど魚が捕れ、それを見たペテロは、思わず「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と叫びました。この言葉から、初めてペテロがイエス様は神だと理解した様子がわかります。

私たちは、誰かを批判したり、つまずいたりする時、その人から非常に離れた位置に陣取っています。例えば、テレビの向こう側にいる首相を批判する人たちは、首相が遠くにいるからそれができるのであって、もし近くにいたらとても同じ態度はとれないでしょう。万一、首相の前に立つことでもあれば、自然に頭を下げ、今まで言っていた言葉と違うことを言い、「光栄だ」「恐れ多い」と感動すら覚えることでしょう。

つまり、神を批判したり、つぶやいたりするのは、その人が神から遠く離れたところにいることを表しています。当初、ペテロの心の中には、一晩中網を張っていたのに一匹も魚が捕れず、「神がいるなら、なんで魚が取れないんだよ」という気持ちが多少はあったのでしよう。ところが、驚くほど大漁になったのを見て、ペテロは神を目の当たりにした気持ちにな

り、神の目の前にいることが恐れ多いと思ったわけです。それが、ペテロの次の言葉に表れています。

「私は罪深い人間ですから。」

人は、神の前に立つと、自分の罪を認めざるを得なくなるのです。逆に言うと、罪に気づく時、私たちは神の前に立っていることになります。ですから、自分の罪深さを知り、「私をあわれんでください」と言う時、私たちは神の愛を受け取ることができるのです。これが救いです。救いとは、神の呼びかけに対して、私たちが応答することです。イエス様がペテロに声をかけ、ペテロはそれに応答しました。

神の呼びかけに応答する時、ペテロに限らず、誰もが罪を照らされます。私たちは皆、神を信じる信じないにかかわらず、何かしらの罪責感を持ったことがあるはずです。実は、それは、神の呼びかけであったのです。神は、私たち一人一人の心に神の律法を書き込み、良心というものをお与えになりました。その律法を通して、罪が示され、罪責感を感じるのです。

ペテロが、この方が神なのだとイエス様に心を向けた時、イエス様は「これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」と言われました。私たちはそもそも互いにキリストの体の器官として、つながり合わされてひとつとなるように造られたものです。つまり、誰にも神の計画があるのです。自分の計画を知り、自分の務めを果たす生き方ができる人は幸いです。

■沈んだペテロをキリストが引き上げる

「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」

(マタイ 14:22-31)

患難にぶつかると神の言葉を思い出すものですが、それが素直に信じられるかというと、なかなかそうはいきません。「本当にこの問題は解決するのだろうか」と、神の言葉が幽霊の

ように実体のないものに思えます。しかし、その時、神は「信じなさい」と語っておられるのです。

水の中に沈みかけたペテロを、イエス様は引き上げられました。神は、引き上げる運動しかなさらない方です。つまり、神に引き上げられるために、私たちは一度沈む必要があるのです。「私は神の助けなど必要としない」と言う人は、助けられる必要がありません。

人生で最も沈む時、それは絶望です。絶望してただ神に助けを求める時、神はその人を引き上げてくださいます。

ところが、人は絶望しても、なかなかそれを認めようとしません。まだ何か他に希望があるのではないかと問題から逃げようとしたり、どうせ自分はダメなんだと放棄したりする道を選択してしまいます。この二つに共通しているのは、神に助けを乞わないということです。

なぜ「神様、助けてください」と言えないのか、それは、すべての人が「こんな私が愛されるはずがない」と思っているからです。「神は無条件であなたを愛し、無条件であなたの罪を赦す」ということが、実は私たちにとって最大のつまづきなのです。「私はあなたを裁かない。あなたを愛し、あなたを赦す。」という神の言葉に対して、「こんな自分が赦されるのか」と人は葛藤します。しかし、神の言葉を信じ、受け入れる時、人は変わります。

パウロは、自分が人殺しであり、良いことがわかっていても実行できない人間だと知っていました。パウロは、「こんな罪人でもいいのですか」と葛藤を抱えながらも、神の呼びかけに応答して神に助けを乞うことを選択し、やがてキリストに対する感謝に行き着きます。

ペテロは神のことばを疑い、沈んでいく中で神に助けを乞いました。実は、私たちも気づいていないだけで、24時間常に沈んだ状態にあります。それは、神に造られた私たちの魂は神を慕い求め、永遠を求めているのに、その関わりが得られない状態にあるということです。人は、罪によって神との関わりを失ってしまったために神を見ることができず、死が勝ってしまうという絶望状態にあります。神を求める自分と肉なるものを求める自分との両方から心は引っ張られ続け、精神は不安定になり、自分の中の葛藤から目をそむけて外に向け、人からどう思われるかを基準に生きるようになりました。普段はそのことに気づいていないのですが、困難にぶつかることで絶望・不安を感じます。この時、自分が沈んでいることに気づき、神に助けを乞うなら、神が引き上げてくださるのです。

■ペテロの絶望

「また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。」

(ルカ 22:24)

最後の晩餐の席で、弟子たちは「誰が一番偉いだろうか」と議論していました。この時、弟子たちは誰もイエス様が十字架に架かることを信じておらず、神に愛されるには偉くならなければならないと信じていました。それは、裏を返すと、「こんな私では愛されない」と信

じていたということです。この思い込みがあるために、「罪が赦され、愛される」ということが、最大のつまずきとなって神の愛を受け取れないのです。そこでイエス様は、最後の手術ともいべき言葉をペテロに残しました。

「……しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」（ルカ 22:32-34）

ペテロは、神に愛されるためには頑張らなければいけないと思っていましたから、「牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」と答えました。ペテロはこの時、イエス様の言葉を信じていなかったのです。神のことばを聞くよりも、愛されるために頑張ることが彼にとっては当たり前だったのです。

「彼らはイエスを捕らえ、引いて行って、大祭司の家に連れて来た。ペテロは、遠く離れてついて行った。」（ルカ 22:54）

ペテロは、捕らえられたイエス様に距離を置いてついていきました。恐ろしくてたまらず、近づくことも、離れることもできない状態です。あなたはどうでしょうか。ある一定の距離を置いて、イエス様を信じていればいいと思っていないでしょうか。ペテロの姿がこれです。

その後、ペテロはイエスの仲間であると気づかれ、その都度、「イエスなど知らない」と答えることが3度続きます。いったいペテロはどのような気持ちだったのでしょうか。さっき自分が言った言葉とは裏腹に、捕らえられていくイエス様の前から逃げ出し、戻ってきてこっそりついていくのが精いっぱいというのが正直な姿です。人の目を恐れ、おびえ、人に良く思われようとする本当の自分が明らかになり、こんな自分が愛されるはずがないと思ったことでしょう。

ペテロはかつて湖の中に沈んで引き上げられましたが、今度は罪を自覚して沈みました。「赦されるなら赦してほしい、助けてほしい」……湖の中に沈みかけた時と同じように、彼の魂は「主よ、私を助けてください」と叫ぶのです。するとイエス様はどうなさったのでしょうか。

「主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。」（ルカ 22:61-62）

大群衆と暗がりの中ですから、ペテロでなければ、イエス様が振り向いて自分を見つめたかどうかわかりません。ですから、これは、ペテロの告白に基づいた記事です。ペテロを見

つめたイエス様の目は何を語っておられたか、それは、「私は怒っていない、それでも私はあなたを愛している」ということです。こうしてイエス様は、罪の中で沈みかけているペテロを引き上げてくださったのです。神は引き上げる運動しかなさいません。そして、神が引き上げるのは、沈み、助けを乞う者だということです。

ペテロは自分のみじめさを認めざるを得ない状況に陥り、彼の魂は助けを求めて叫びました。神に引き上げられたペテロは我に返り、主の言葉を思い出し、愛されていると知って、感極まって泣き出しました。ペテロが外に出て激しく泣いたのは、絶望の時に愛されているとわかったからです。

絶望する勇気を持てば、神が引き上げてくださるのです。「私に罪はない、自分は立派な人間だ」と言う人は、神と何の関わりもありません。イエス様は、自分は立派だと自認するパリサイ人ではなく、「こんな罪人をあわれんでください」と祈った取税人を義と認められました。自分を低くする者は高くされ、絶望を告白する人は引き上げられるのです。

私たちは皆、絶望的な罪人です。そのことを認める勇気を持ちましょう。そうすれば、神が私たちを引き上げてくださるのです。